

1975年の国際会議 (IFORS・TIMS) 開催に向けて

森 口 繁 一*

1975年7月に、OR関係の二つの国際会議がわが国で開催される。一つはIFORS (International Federation of Operational Research Societies) の大会であり、もう一つはTIMS (The Institute of Management Sciences) の大会である。この両組織は姉妹関係にあり、この二つの大会が相ついで開かれることは、わが国のオペレーションズ・リサーチの歴史の上で画期的な意義がある。

日本オペレーションズ・リサーチ学会は、1966年創立以来着々と業績をあげ、その英文誌およびその他の国際活動を通じて、わが国のORが海外でも高く評価されるに至っていることはご同慶のいたりである。この高い評価が、やがてそのうちには国際会議を日本で開きたいという期待につながるのはきわめて自然であろう。IFORSではこの期待が、数年前から大いに高まっていて、1972年の大会を日本で開こうというまでになっていたのであるが、大学紛争のこともあって、日本はそれを見送ったという事情がある。一方TIMSのほうは、すでに1963年に東京で国際会議を開いてわが国のORに強い影響を残したのであるが、それからもう10年にもなるので、そろそろまた日本でということになったもようである。

日本は、いわゆる東西の接点にあり、また多くの開発途上国からも近い。いまや世界が東西の融和と協調、南北の共存共栄に平和への新しい道を求めて大きく動きつつあるときに、日本で開かれる国際会議への海外からの期待に格別なものがあるのは、まことに当然である。われわれはこの期待にこたえて、こんどの大会を、東から西から、北から南から、ほんとうに世界中から人の集まる大きいつどいとするに、格段の努力を注ぎたいと思う。

わが国自身にとっても、この大会はORの躍進のための絶好の機会である。各種の理論の展開において、また個々の問題への適用において、目ざましい業績をあげた日本のORを、この機会に大きく前進させて、現在企業や行政に解決を迫っている重要な諸問題に立ち向かう力を引き出し、結集するために、また国際感覚を身につけ、諸外国の人たちといっしょに仕事のできる、すぐれたORマンを育てるために、この機会をできるだけよく活用したいものである。

* * *

IFORSは、各国のOR学会の国際的連合体といった性格のもので、現在25カ国がこれに加盟している。この加盟各国に、一定の公式に従って出席人数が割り当てられる。1975年の大会の参加者は、日本人を含めて500人と予定しているが、距離の関係もあって、海外各国からの出席

* 東京大学工学部。

人数がそれぞれの割当数の何割に達するかが運営上の大きな問題点である。

一方、TIMS のほうは、もともと個人ベースの団体であり、しかも大会参加資格としては会員である必要はなく、多ければ多いほどよいという考え方を持っている。むしろ参加人数を大会の「成功の度合」を測る尺度とするぐらいだということで、これも一応の目標を500人と定めているが、状況によっては1000人でも2000人でも歓迎したいと考えている。

会期は、IFORS が正味5日間、TIMS が3日間（あるいは3日半）の予定である。場所はIFORS が東京で始まり、途中で週末を利用して京都に移動、京都であとの3日間をやるのに対し、TIMS はそのあとを受けて京都で全部やることになっている。

IFORS のプログラムとしては、主要講演および各国 OR 学会論文発表のほか、現場討論会、事例研究会、夜店式討論会など、いろいろな趣向が提案されている。現場討論会(field trip)というのは、オクスフォードで開かれた第1回の大会でも一部試みられて好評だったのを、今回はぜひ復活させたいということで、たくさんのグループに分かれ、官公庁や企業の現場を見学してから、その場で、その人たちとひざをまじえて具体的な問題について討論しようというものである。現場の人たちにとっては、外国の著名な学識経験者に接する好機となり、外国からの参加者に対しては日本を、ことに日本で OR の適用される現場を、はだで感じることのできる、またとない機会を提供することになる。事例研究会(workshop)は、これまたテーマごとに多数の部会に分かれ、密度の高い討論が行なわれる。どの部会にも日本人の世話役がいて、討論の進行を援助するとか、部会長には英米人以外の人を据えて英米人ばかりがペラペラしゃべることを防止するとか、運営上いろいろ工夫されるはずである。

夜店式討論会(forum)の名は、そのむかしローマの中心にあった市場に由来するもので、広い部屋の中にたくさんの机といすを並べ、一つの机に2人ずつぐらいの割で「夜店」を出す。つまり展示資料などを用意して「客」の来るのを待つ。(たとえ客がまったく来なくても、同じ机の2人で話し合えば退屈しないですむ!) 客が来れば客と自由に討論する。「夜店」は時間割に従って順々に開かれる。客は自由に好きな夜店を選んで話をきき討論する。この形式は、関心の多様化するこれからの学会の大会運営の新形式として注目され、アメリカあたりでも試みられ成功しているということで、IFORS としても、ぜひこんどこれを成功させたいと、現首脳部が大いにはりきっているものである。

TIMS のプログラムの方針は、これからしだいに輪郭がはっきりしてくると思われるが、すでに特別講演者(distinguished lecturer)としてダートマス大学の Kemeny 学長が決まっております。従来の例からすると、多数の個人発表が行なわれるものと予想される。そのほか、こちらのほうでは college(単科大学?)と呼ばれる会合もいろいろ持たれ、初心者向けの指導集会(tutorial session)のような運営も可能である。いままで OR のある側面に十分通じていなかった人が、その方面についての理解を深めるという目的にこれが役立つと思う。

「夜の部」も、パーティやら晩さん会やら、いろいろ催される予定であるし、同伴の夫人がたのためには婦人番組(ladies' program)も用意されるであろう。これらを通じて国際的な接触と

交遊が促進されることも、将来のために大きい意義のあることである。

* * *

これらの行事全般にわたって、その効果をあげるために最もたいせつなことは「積極的に参加する」ことである。受け身で、わかっているようなふりをして、だまって聞いてばかりいるというのではなく、能動的に、いわば、なりふりかまわず相手にぶつかっていくことによって、貴重な何物かをつかみとるという態度が望ましい。この態度さえあれば、言葉の障害はなんとか克服できるものである。

言葉の障害という点では、日本人ばかりでなく、海外からの参加者の相当な部分が実は同じ悩みを持っているのである。そういう人たちと、へたな英語どうして話し合うのも互いに楽しく、かつ有益であろう。また英米人も、われわれと討論し会話する際には、われわれの歩調に合わせてくれるので、けっこう通じるものである。通じなければ遠慮なくいいおすなり聞き返すなりしてねばるのがよい。国際会議はそういう修練の場として最大限に活用すべきである。

大会まであと2年と少々。長いようで短いこの期間を、それこそOR的に賢明に利用して、外面的にも内面的にも立派な大会となるように準備を進めたいものである。会員のみなさん、がんばっていこう！